

槐

かい

岡井省二創刊

平成27年11月号



好好爺

高橋将夫

秋天を余白としたる富士の山
故障したやうにきちきちばつた飛ぶ
踊の輪切れてもすぐに繋がりぬ
金風を男の胸が受け止める



マドンナは今もマドンナ敬老日
敬老日天下国家を論ずべし
魂に年齢はなし天の川
猿酒に酔ひ曼荼羅にまぎれ込む
阿波踊はて存分に生きたるや
大輪の菊を育てて好好爺
銀河系宇宙と浄土系宇宙



槐安集

水野恒彦

遠ざかる日輪草矢打ちつづけ
うどんげに烟の匂ひ火の匂ひ
待つといふ時間の尖は蟬しぐれ
斑鳩に穴ひたすらの蟻地獄
守宮鳴く眠れぬ夜の星遠く

加藤みき

淡海の実生の芭蕉咲きにけり
すいつちよの長居をしたる畳の上
百日紅腕わなわなと達筆なり
山女の川ここを通りて普陀落へ
秋彼岸墓道に立う土ぼこり

中島陽華

朝涼の泰山木と片瀬波
もろ声やでん助西瓜赤と黒
半夏かな彼岸此岸の投げキッス
みみず腫れ消えてもうたる大暑かな
白南風の野外演奏牛ぶも来て

竹内悦子

甚平に着替へてゐたる好々爺
さるすべり鯛の味み噌そ吸ずと兜煮と
羅や売子の胸の豊かなる
神棚に走る影あり御器ごき噛かり
いなつるび臍の裏まで覗のぞかるる
御器噛りごきかかり



雨村敏子

苦瓜の勾玉いろに朝の風
鬼灯を抱へ祇園の橋の上
夕風や晩夏はいつも酔の匂ひ
戦あとの七十年ぞ魂祭る
臆たけし眉のわたりや生身魂

本多俊子

火の山の匂ひとどめて銀やんま
岩清水卒寿のいのち惜しめとぞ
ひそかなる廊下の音や敗戦忌
貝殻の秋思の縞を拾ひけり
泡沫うたかたの消えて水面は月のもの

近藤喜子

秋の蟬なにか言ひ置くやうに鳴く
静けさを聴く秋水の流れかな
秋聲や踏まれたる草たち上がる
たましひの熱きをさらし虫鬼灯
ふところところに仏も鬼も大瓢

瀬川公馨

客らしき客のをらねど灸花
打ち水や高張提燈点さるる
池の面の夕焼の色盗みたる
秋天や遠近の山ひとしなみ
星月夜魚見櫓に男かな

久保東海司

河童忌や日本の童話読み聞かす
一山の聯の干涸び蟬涼し
蕉翁の碑に存問の虫を徹す
落し文ひもとけば文字なかりけり
早駆けの馬體艶あり大花野

柳川 晋

梅雨明の空にによきつと金剛山こごうざんかな
雲ひとつなき空なりし原爆忌
億年の過客なりけり流れ星
龍踊狸踊に浪花締め
淑やかさが嫺やかとなる風の色

熊川暁子

朝ぐもり顔うつるまで鎌を研ぐ
メロン切る等分といふ不確かさ
字を苔に食はれし墓を洗ひけり
法然は岩をも穿つ山清水
江戸前の声ごと入れて握り鮎

寺田すず子

流れ行く刻を追ひたり萩の月
身構へて立ちならびけり鶏頭花
鯛の住処となりし大樹かな
犀の角ひつかけてゐる大西日
八月尽吼ゆる淡海の夜明けかな

岩下芳子

強運の一白水星生身魂
フイナーレは変幻自在大花火
街の名の師団街道終戦日
代代の枡で量りし今年米
宇宙より見る台風の目が三つ

近藤紀子

ストローでアイスクリームつつきをる
プールの子と遠く目が合ふ嬉しさよ
ライオンの昼寝姿のしどけなき
漬かりよき茄子佛前に供へたり
大西日坂の上より人のこゑ

岩月優美子

覗きたる水に映りしわが秋思
星月夜何時しかこころ透明に
生きるとは燃え尽きること緋のカンサ
流星やしかと有りける我が五体
海の景動から静へ八月尽

竹中一花

六道の辻を離れて油照り
さそり座やカーテンの間に街の音
初秋のオカリナの息長くあり
菩提子のぼたぼた降るや白ベンチ
心経を枕に二十日秋立てり

槐市集

有松洋子

夜の卑弥呼桃のしづくを唇に受け
送り火や生者は闇にしりぞきて
広野行く残る螢のゆくへかな
秋の蝶しづかに独りの道をゆく
わが一語白桃のごと実れかし

犬塚李里子

落し穴何処にもあり竜田姫
親しかるひとの逝きたりつく法師
満月や幽明の空そらに吊られをり
青嵐妬心を晒しをりにけり
はらからや沖の果より夜光虫

井上静子

新装のパン屋に列や秋高し
苦瓜のにがみが好きと言ふ漢
線香の煙のぼりし野分晴
秋澄むや読み聞かせたる声のいろ
重陽の豆腐づくしの夕餉かな

今井充子

朝顔の未だ開かぬ色を待つ
撫子や手折りたをりてまた咲きぬ
満月や人も神話も抱きゐて
梅雨豪雨人の生活狂はせり
白靴のりハビりに添ふ半歩あと



江島照美

びつしよりになるまで続く水鉄砲
落ちこぼれそれもいかな菊日和
精霊と共に輪のなか盆踊
指先に色香漂ふ阿波踊
パパとママ仲良くと書く願の糸

岡田桃子

内向きに咲く花ありて朝顔棚
満満の用水稲穂を映しをり
新米を満たす大波寄する音
天鷲^{ヒロ}絨^ドの艶もてなびく出穂田
雪溪に映える紺碧みくりが池

久保夢女

一步引くそれからダツシユ雲の峰
露をおぶバラの洗礼十七歳
延びてくる十本の手^に西瓜切る
星涼し悠久と言ひ永久と言ひ
盆踊り此の身はゆれてヤツサのホイ

後藤マツエ

子等の嘘に南部風鈴音澄めり
金箔の蛾鱗粉こぼし反転す
小さき蚊の翅音は高し夜の秋
夕星や喝采下は大花火
秋めくや鈴蘭の実のいよ濃し

阪倉孝子

青野^{姉遊く}ゆき童話の森に眠りけり
湯灌して紅さす手許虹光る
遙かより呼ぶ声のあり青田波
青田波かがよふ夕べ旅立ちぬ
車椅子はるかとなりて星月夜

柴田靖子

忘れえぬ目と星空の終戦日
海馬すつきり机にある白露かな
日照雨きて七夕馬の足をとむ
処暑の日の草木も空も涼やかに
ちちろ虫一人居の闇あかるくす

杉原ツタ子

扇屋の扇放たぬ左党かな
利き酒はとうに済ませりさるぼぼも
秋風とゆかりの寺の紫煙かな
善峰の遊龍ゆりゆうの松と秋茜
農機具小屋は茅葺よ蚩草



槐集

高橋将夫選

蟬は腹我は心を震はせり
大阪 江島 照美

存在の証も消えて敗戦忌

箬枕 陶枕よりは膝枕

蟬時雨バリアの中にある私

生身魂引接を説く閻魔堂

我よりも体温高き鶏頭花

山といふ母の御胸へ木の実落つ

今生を踊りつづける女ある

あさがほや深き海ともみ空とも

青空の裂けて碎けし原爆忌

水底の石の白さに秋立てり

手にふれてこころにふれて葉鶏頭

流星に揺るる夜空ののこりけり

山巖の切込み深し盆の月

水の秋いのちあるものみな映る

岡崎 吉田 順子

有松洋子

幻のやうないち日酔芙蓉
岡崎 犬塚李里子

海鳴りを遠くに聞きて墓洗ふ

莢^{がま}莢^{ずみ}にふと纏ひくる愁ひかな

寒蟬の啼きつぐ空の深さかな

爽籟の掠めて行けり前頭葉

秋天や播磨手中に姫路城
喜屋川 前田美恵子

我が命捨て難きかな揚花火

オーロラに音階あらむ秋の声

水中花何処から見ても真正面

笑ひ皺の増ゆる人生布袋草

さざ波の秋あきあきとささやきて
岡崎 柴田 靖子

火の影を四辺にのこし秋茜

秋螢影淡あわとたしかなり

いつしかに秋色つれし潮頭

猫じやらし我も遊ばむ風の中

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

蟬は腹我は心を震はせり 江島 照美

懸命に鳴く蟬の腹の震えに自分の心の震えを重ねたところが、何事にも一生懸命な作者らしい。

〈存在の証も消えて敗戦忌〉の句は戦没者の遺骨収集活動の映像を思い出させる。未だ帰らぬ多くの遺骨。戦争はそれらの人々の命ばかりでなく、存在の証さえも消し去ったのだ。

〈生身魂引接を説く闇魔堂〉の句、「引接（いんじょう）」は仏が衆生を導くこと。極楽往生を説いている場所が闇魔堂であるところがシニカル。生身魂の神妙な顔が目につかふ。

〈蟬時雨バリアの中にある私〉の句、バリアが唐突なようだが、蟬時雨の中でバリアを張りたい気持ちはよくわかる。〈箸枕陶枕よりは膝枕〉の句、たしかに陶枕よりは膝枕の方がいい。箸枕まで持ち出して、箸枕・陶枕・膝枕と畳みかけたところが俳諧。

山といふ母の御胸へ木の実落つ 有松 洋子

山で木の実が降る景だが、「山といふ母の御胸」が母の懐の深さを思わせる、いかにも作者らしい詩的な表現。

〈我よりも体温高き鶏頭花〉の句、鶏頭に触れてかなりのぬくもりを感じたのであろう。鶏頭の赤に血潮の流れを感じたとすれば「体温」という表現も納得できる。〈今生を踊りつつける女ある〉の句、踊っている時のように夢中で過ぎて行く一生で

ありたいと私も思う。〈あさがほや深き海とも空とも〉の句、朝顔には海山のような深さがあるとされていて納得。

水の秋いのちあるものみな映る 吉田 順子

秋の澄んだ水になら、どんな草木も虫も雲もさぞ輝いて映ることだろう。〈水底の石の白さに秋立てり〉は立秋にピッタリの一句。〈流星に揺るる夜空ののこりけり〉の句、「流星に揺るる夜空」の感性が新鮮。

爽籟の掠め行けり前頭葉 犬塚李里子

秋風が顔を掠め、頭の中まで爽快さを覚えたという。「前頭葉」の字づらから、木の葉のそよぐ景が連想されておもしろい。〈幻のやうないちにち酔芙蓉〉の句は、「幻のやうな一日」に「酔芙蓉」の幹旋が見事。

笑ひ皺の増ゆる人生布袋草 前田美恵子

加齢の皺も「笑ひ皺」に変えてしまう心意気がたのものしい。「布袋草」が効いている。〈秋天や播磨手中に姫路城〉は大景。〈水中花何処から見ても真正面〉、〈オーロラに音階あらむ秋の声〉の句は、それぞれに作者ならではの視点がある。

さざ波の秋あきあきとささやきて 柴田 靖子

秋のさざ波の音のリフレインが生きている一句。

白菊の高くありけり天地人 中田 禎子

白菊を天と地と人の大景に配したところが見事。

〈以下略〉